

大張の礼の日
 将軍任命 将軍任命
 4900 4809 6月29日
 6月29日 6月29日

4,909P

大倭国 (肥後国) の古京

七月三日

翌七月三日。男吹負は、まだ自分が大倭国

(肥後国) 方面の將軍に任命されたことなど

知る事もなかったろう。であらう。

この日、男吹負は、大倭国 (肥後国)

の古京を守る為、軍兵を率いて、乃樂山

に相当する川木葉山 (三八三) の山頂から東

南へ連なる尾根の上に駐屯した。たゞとてあ

かううか。

近江 (大宰府) から南下して来る敵は、大

牟田・荒尾を経て玉名へとつづく狭長な海浜

の道を逢み、菊池川を渡り、そして眼下に見

おろす街道を駆け抜け、田原坂・植木へと

向かうだろう。

しかし、山上から遙か遠くの方を見渡して

みても、いまのところ、敵兵らしいものの気

配は無かった。

さらに北の方へ、移動すべきであらう。

か

また元1433
徳田道方より

價 道のわたり

28190

参詣元 916'
祈願元 516'

$$4,910^p - 1/2$$

本學 厚文紀下399⁷

本堂 厚文紀下399²

紙 398⁷ 2行~

本館 函 4914⁰ 1159

するとその時、荒田尾直赤麻呂が、
 「我が軍には兵がわづかいかいないのだから、
 あまりにも近江へ大宰府に近づくと
 は危険です。近江の軍兵たちを、近江から出
 来ただけ遠くへ引き離しておいて戦うべきで
 ありましよう。古京（その昔の神功皇
 后の前）は、いわば本営（ほんえい）ともい
 うべきところで、古京を固
 めます。打って出て戦うよりも、古京を固
 め守って戦った方が良いうちに思われま
 す。」

と、男吹負に進言した。
 男吹負はこれを採択し、荒田尾直赤麻呂と忌部首子人を遣わし、
 古京に古京を守らせ、
 是に、赤麻呂らは、
 古京に詣り、
 参詣祈願し、
 もしかしたら、
 赤麻呂らは、かつて神功皇后が都された
 古京（合志原の都）に詣り、参詣祈願し、
 ということを示唆しているのかも知れない。

4,910^P-3/2

所^{ところ}に^に立^たて^て守^{まも}った。
 櫓^{やぐら}の^の背^{せい}後^ごに^に人^{ひと}が^が居^いる^ると思^{おも}わ^わせる^る為^{ため}だ^だ。
 た^たの^のだ^だう^うか^か。
 し、櫓^{やぐら}に^に作^{つく}り、^日京^{みやこ}の^の辺^{ほとり}の^の衢^{ちまた}（^道道^{みち}の^の分^{わか}小^こる^る）
 赤^{あか}麻^{あさ}呂^ろう^うは、^道道^{みち}路^ろの^の橋^{はし}の^の板^{いた}を^を壊^{こわ}

*

前頁
17

H5.11.7(日)⑥
P

4.911 P-1/2
かは合た

紀F530P皮石部
新P(17-96)

いっちょ走
133
通走はうえ1636

将軍大野 上下299
宇路下238
>化T398に等なり

ちまたを1433
街道のわがやう

七月四日

●翌日の七月四日。近江(大宰府)の兵達が

大倭国(肥後国)へ進撃してきた。

●男攻負は、近江方の将軍大野君果安と、乃

楽山(木葉山の東の田原坂)で戦ったが、一か

安に敗れ、兵士はみな遁走し、男攻負もかうじて

のがれた。(第は四(田原坂)で真図版760(田原坂)参照)

●果安が、逸走する者達を追って八口(赤口)かへ至り、小高い

ところへ登って京口を見るとき、合志原の古京の

ういうことなだろうかと、合志原の古京の

街(分れ道)毎に、楯が立っていた。

●果安は、何か計り事があるのかも知れな

い、と疑った。

●そういえば、男攻負の軍が意外にも脆く崩

れて、一目散に八口へ逃げたのも、

へあるいは、策略であつたのだろうか

と思えてくるのだった。

米

128

4,911^P 2/2

- ・カラー
- ・頁の上半分に大きく載せ下さい



1409 写真図版 760 ^{たばるさか} 田原坂 (一の坂から三の坂まで上って、^{たのぼり} 田原坂公園へたどり着く)

1309

- 1209 『くまもと花の名所』 熊本日日新聞社、1994年3月1日発行、31頁参照
- ・ 明治10年、^{せいなん} 西南戦争の時、^{たけふ} 田原坂が最大戦地になった、^{けいせんち} 西軍の戦死者4,000余人
 - ・ 当時、^{たいほう} 大砲が通る道幅があつて、^{みちのはな} 玉名から熊本へ至る道路は、この田原坂の道(かなた) (河出書房新社、1997年11月10日発行、169~171頁、他参照) 161^P

小林 960' 攻守 441' 攻守 441'

4912' 奈良山 1675' 古京(飛鳥) 宇奈谷下 38' 「とこで」 4890' 4934'

ところ、
へ將軍吹負は、
山に残つて、
一方、
古京に楯を立てて守つた
と解されてきた。
かゝながら、
へ本当にそのようなだろうか
と疑問視される。
奈良盆地北端の乃樂山(奈良山)から、
奈良盆地南端の飛鳥までは、
約二十キロほど
飛鳥の古京に強大な陣營があるわけでもない
の、吹負らが敵に追われ、
もの平野を、ひたすら自軍の
の方へ向かつて逃げていったというの
更に、飛鳥は平地にあって、
攻守に適して

4.9/3

吹負ら^{ふけひ}が追撃^{おひげき}されて飛鳥^{あすか}へ逃げ込^こんでも、
どうしようもない^{とまりまもつかさ}と思われ^{おも}れる。
(3) ち^ち夜^やりに留守^{るす}司^しを置^おいて飛鳥^{あすか}を守^{まも}らせてい
た近江^{おうみ}方^{かた}、
古京^{ふるきみやこ}は是^{こゝ}れ本の^{ほん}の宮^{みや}の處^{ところ}なり。固^{かた}く守^{まも}るべ
し^しと言^いつて、吹負^{ふけひ}・赤^{あか}麻呂^{まろ}らを追^おい松^{しょう}い守^{まも}つた
とい^いうのなら分^わかる。しかしなせ吹負^{ふけひ}ら^らが飛鳥^{あすか}
の古京^{ふるきみやこ}に固執^{こしつ}して守^{まも}らなければなら^らないの^の
だらうか、と納^{なつ}得^{とく}し難^{がた}い^いわゆる。
(4) いか^いかも、近江^{おうみ}の将軍^{しょうぐん}大野^{おの}君^{きみ}果^はたは、飛鳥^{あすか}の
古京^{ふるきみやこ}を奪^{うば}回^{かへ}する^{こと}に、格別^{かくべつ}闘志^{とうし}を燃^もやして
いたわけでもなさ^さうである。動^{うご}きも^もない^い櫓^{やぐら}が立^たつ
ているのを見^みて、やや^{やや}に引^ひき返^{かへ}したとい
うのである。
(5) だ^だい^いち、古京^{ふるきみやこ}と書^かかれ^ているだけで
あ^あつて、^{こゝ}に飛鳥^{あすか}の^{こと}だとは、
こ^こにも記^きされ^ていない。
へ読^よ者が単^{たん}純^{じゆん}に、古京^{ふるきみやこ}とは飛鳥^{あすか}のこと

仕組む 956P

6/26 7/1
27 2
28 3
29

ほんえい 2053P
本学 袋大将の軍書 紀下390P
注完/ ニニニ 7月4日 中 17-2

ちまた 小林 871P
街 十言拾

4911P 4,914P 4910P

→ H5.11.8月④

である、と思ひ込むように
仕組んであるだけのことなのであろう。

この物語では、

へここにいいう日古京とは、かつて神功皇

后が都を置かれた合志原の地を指している

と解してみたい。

先に述べたように、大海人皇子が、天照大

神へり神功皇后に戦勝を祈願されたのは、

六月二十六日のことであつた。六日後の

そのことを伝え聞いた赤麻呂は、七月三日に

神功皇后の古京は、是れ大海人皇子

軍の本宮の處なり。固く守るべし

と言つたのであろう。

そして七月四日、先に述べたように、

男吹負らは乃樂山(木葉山)で敗れて南へ

逃げた。果安らがこ水を追つていくと、

すぐに合志原の古京の地に至つた。そ

こには街(分かれ道)毎に楯が立つていた

ということなのであろう。

日本書紀には、このところ、次のように

記されている。
果安、追ひて八口に至りて、

果安、追ひて八口に至りて、

(17)

25

H9.5.4(日)
→ H5.11.10(水)

4,916^P

SET 624^P

OK

たすつかさ

の^{たすつかさ}職大夫直広肆果^{はたけ}安の子なり

とある。

・大野君果^{おののきみはたけ}安^{やす}は^レ壬申^{にんしん}乱^{らん}の^お折^{おり}々^お大^おき^きな^{こう}功^{こう}績^{せき}が^ああ

たので^そ天^{てん}武^ぶ天^{てん}皇^みの^を御^み代^よに^をコ^{たすつかさ}の^お職^{しやく}大^お夫^ふ直^ち広^き肆^し果^{くわ}に

と^そて^そ仕^しえ^えた^たの^であ^あう^うと^と思^しわ^われ^れる^る。(一^一日^日

本書^{ほんしよ}紀^き下^げ日本^{にっぽん}古^こ典^{てん}文^{ぶん}学^{がく}大^{だい}系^{けい}、六^{ろく}二^に六^{ろく}頁^{えい}二^に段^{だん}

「^し職^{しやく}大^{だい}夫^ふ」参^{さん}照^{しやう}」

米

紀下398^p 田中臣足麻呂 4902^p 紀下396^末 倉屋 4902^末 度 紀下388^近 ④4824¹ 行 別動隊 紀下398^近 1994^p 紀下398^近 19

阿蘇の北の道、および阿蘇谷での戦い

七月五日

七月五日。近江の別将（別動隊の将）田

辺小隅は、鹿深山（滋賀県甲賀郡の山に相当）を越え、

すゝ阿蘇北方の山へを越え、
を抱いて、
（不明。浮羽から阿蘇へ抜けるあたりの地）

近江の別将田辺小隅は、
倉屋から、阿蘇谷へ降り、大倭国（肥後

国）の平野部へ進撃しよう

としていたので、
（真夜中ごろ、田辺小隅は、人馬の口に梅

（箸状のもので、進行中の談話や馬のいなを
きを防ぐもの）を含ませ、城を穿って（城柵

をこわしての意か）
宇って、いた湯沐令田中臣足麻呂の軍営に

いきなり、龍いにかかった

H29(2013)7.12.16
H5.11.11(木) とうとう
北走 1573
→

改行

②F38639 ③の
多臣品は 刺萩野 ④4822
⑤336P ⑥4902/234
⑦4.918P

しつせん
突進 前18分
②

②F398 ④分

七月六日

＊

七月六日。田辺小隅は、さらに進んで阿蘇

谷へ降り、刺萩野に相当する所

阿蘇神社がある宮地あたりの設けられた軍営

湯沐令多臣品治の軍営に襲おうとして殺

到した。押寄せた。おほのおみほむち

いかし。將軍多臣品治は、これを防ぎ

とめ、さらに精兵に追撃させた。田辺小隅は

ひとり脱出。逃走した。以後、この方面か

らの近江方の来襲は、ついになかった。

田辺小隅は、自今の兵と田中臣足麻呂の兵
との区別がつかなくなるのを恐れ、人に出会
うことには「金」という合言葉を使わせた。
田辺小隅の兵達は、刀を抜いて振り殺し
「金」と言わない者を斬った。
田中臣足麻呂の軍は、真夜中のことであ
り、あまりにも突然だった。どうしよ
うもなく、大混乱におちいった。
唯一田中臣足麻呂だけは、すばやく合言葉
だとさとって「金」と言い、かろうじて脱出
することになった。

紀下399P
④4928

せめ 賛 元1255?
④4908 4.9/19P

紀下399P ④49312P

紀397P末 ④4907P
④4904Pに同文

大海人皇子軍の本隊、近江京（大宰府）へ迫る

七月七日

七月七日条に、
軍の本隊の活躍ぶりが述べられている。

五日前の七月二日条に、
村国連男依・書首根麻呂・和珥部臣君手

膽香氏臣安倍を遣して、
破より出でて、直に近江に入らむ

とあるが、
は、どこで何をしていたというのだろうか。

日本書紀には明記されていないが、
高市皇子の軍は、京家の地の水沼君を始めと

近江方の精兵等と激しく闘きあい、
進んでいったと述べている。

さてこの日（七月七日）の戦闘について、
う記されている。

（村国連）男依ら、
横河に戦ひて破りつ。其の將境部連葉を斬

りつ（紀）
大海人皇子軍の本隊と、大友天皇軍の本隊

とが、真正面からぶつかったであろう。

後の京
紀下390末
後京
紀下406
末二行

H30 (2018) 11.16 (金) ~ 11.17 (土)

下 1/6
上 1/6

(市) 4449P
紀下 335P 1行

神功皇后 (息長足一)
4,920P

息長
息次

地名 343P
349P

福岡県へ 101P
日本の 101P (2) 256P
4928P 69P

おきなる
西軍井 地名 734P

米

尾張国に流された(紀)
有間皇子の変に連座して
また先に述べたように、境部連座は、
香榎を中(香榎)と、た地域が、近江国の「息長」(参考)
に相当すると考えら小たように思われる。(既述)

田為三郎、名著出版へ息長へ息次へ(参考)
香榎を中(香榎)と、た地域が、近江国の「息長」(参考)
に相当すると考えら小たように思われる。(既述)

「海浜を息次」といったという。(「帝国地名辞典」太
と解いてみた。
なお、博多湾東岸の香榎あたりの海浜を息

破り、その将境部連座を斬った
たりで、近江(大宰府)の軍と戦って、こ水を
当する所、博多湾東岸から少し東寄りのあ
少(東寄りの)滋賀県坂田郡米原町醒井に相

このところ、(不破関跡の西南約十町)
大進人皇子軍の男依ら、琵琶湖東岸から
息長の横河、琵琶湖東岸から

の西南(十町)

滋賀県地区

七月九日

■二日後の七月九日。村国連男依らは、近江

(大宰府)の将秦友足を鳥籠山に討ち、こ小

を斬った。(紀)

■なお、万巻四一四八七、同十一一ニ七一〇

によつて知られる鳥籠山は、近江国坂田

郡鳥居本村の南(滋賀県彦根市正法寺町の東

にある正法寺山(俗に鍋尻山)の古名だと

う。「帝国地名辞典」太田為三郎、名著出

版「鳥籠山」「鳥籠」五万令の一地図、写真図版

(鍋尻山)参照

八三九の山

↑↑↑↑平安末期の歌人藤原俊成の歌に

まわっている鳥籠山は、かなり高くて深

いであつたことを思わせる。「朝日新聞」名

所再見「鳥籠山」参照

鳴く鹿は、峰が麓が鳥籠の山

旅の枕に声送るなり

と歌つているのである。(長秋詠藻)

岸の小山であるうしと見る説もある(写真図版762)

鳥籠山は、彦根市内を略西流している

岸の小山であるうしと見る説もある(写真図版762)

新南抄 人859 549 二段 4.921-1/5 鍋尻山 近江の山を歩く64Pに載る 地8811073 万①-2437 万③-2277 4.928779

カット

4,921^P-2/5

カット

↑
・右頁の
上半分、
左右限
一杯大き
掲載下か



カット

なべじりやま とこのやま 838.3m
写真図版 761 鍋尻山 (鳥籠山)
『近江の山を歩く』 草川啓三^{くさがわけいそう} ナカニシヤ出版 2000年7月25日発行 64頁参照 172^P

4,921 3/5

カット
←

・右頁の右下、
はみ出して
大きく掲載
下さい。



小野小町 270頁
とこの山は、
「めかろもろすむ」
と「めかろ」の
たまひけ

↓

↓
カット

写真図版 762 芹川北岸の鳥籠山
（せりかわ） （このやま）

145m

歴史の旅『壬申の乱を歩く』倉本一宏、吉川弘文館、2007年7月1日発行、138頁・146頁参照

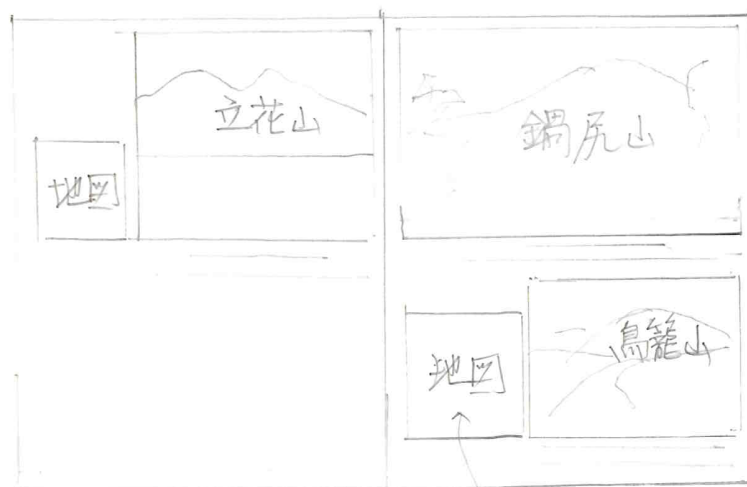
・芹川の古名は「不知哉川」である。（「帝国地名辞典」太田為三郎、名著出版、昭和49年10月23日発行、109頁）
（せりかわ） （このやま） （いさやがは）

小野小町 269頁ルビ 芹川来にも

173↑

4,921^P - 4/5

カト
↓ 井川を、太い線7に変更して下さい。



13
64 第518図 井川近傍図

4,921^P - 5/5

・カラー

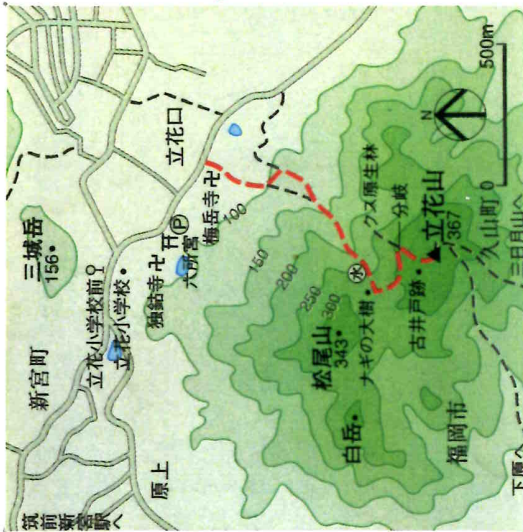
左頁の上半分に。
左右限度一杯はみ出して
掲載下さい。

・写真が暗い。
もっと明るくして下さい。

・南・北を記載しておいて下さい。↔北
こちら側を、
上に配置する。

余白部分に、文字を入れないで下さい。(校正の時、たいへんです)

・写真の上・下は、適宜^{てきぎ}カットして下さい。・空のヨコレをトリ ⇒ カット



× 縦書きにしないで下さい。
× ママでよい。

140G

写真図版 763 博多湾東岸の立花山 (367m)

130G

『九州百名山』山と溪谷社、2002年8月1日発行、14頁参照。

H.S. 11.12.20 (5)

紀下399^p

1946^p

4.922^p

4919^p 8行

かいり 海路 陸路

大カン 2045^p

ヤル X いすたせる

あるいは、博多湾東岸、香椎のすぐ東に
える立花山（「タツカノヤマ」と訓める。三
六七の山の山）が、琵琶湖東岸の彦根のすぐ東
に、鳥籠山（琵琶湖の北に比して）
考えられていたのかも知れない。（写真図版763「立花山」参照）
香椎の東の立花山は、海陸路の望標とされ
たほどの山であり、七峰ある。（「帝国地名
辞典」太田為三郎、名著出版へ立花山参照）
ともあれ、七月二日に不破から出撃した男
依ら数萬の軍が、五日後の七月七日、九日、不破
の西南（十時）十五時あたりの、まだ近江軍と戦って
いたというのは、肝に落ちない。第514回（壬申の乱要図）参照）
西および東の「置始連菟」（父と子か）
天武紀元年七月九日の是の日条に、こう記
されている。
是の日に、東道將軍紀臣阿閉麻呂等、倭
京の將軍大伴連吹負近江の爲に敗れしこと
を聞き、軍を分りて、置始連菟を遣いて、

うたが
疑はし 191^p

4.923^p

④491^p

7/2 3 4 5 6 7 8 7/4

⑤490^p ⑥490^p ⑦490^p ⑧490^p ⑨490^p ⑩490^p ⑪490^p ⑫490^p ⑬490^p ⑭490^p ⑮490^p ⑯490^p ⑰490^p ⑱490^p ⑲490^p ⑳490^p ㉑490^p ㉒490^p ㉓490^p ㉔490^p ㉕490^p ㉖490^p ㉗490^p ㉘490^p ㉙490^p ㉚490^p ㉛490^p ㉜490^p ㉝490^p ㉞490^p ㉟490^p ㊱490^p ㊲490^p ㊳490^p ㊴490^p ㊵490^p ㊶490^p ㊷490^p ㊸490^p ㊹490^p ㊺490^p ㊻490^p ㊼490^p ㊽490^p ㊾490^p ㊿490^p

4.923^p

千余騎を率て、急に倭京に馳せしむとある。

一かーなから、この記事は奇妙であり、素直に受けとることは出来ない。

七日前の七月二日に、大海人皇子は、東道將軍紀臣阿閉麻呂らを伊勢(伊邪)・大山(阿蘇)の外輪山より、えを越えて、大倭国(肥後)の方へ向かわせになつた。

そして五日前の七月四日に、男吹負は、近江(大宰府)の将大野君果安と乃樂山で戦い、敗れて逃げ、是に、大野君果安は、追つて古京の近くまで行つたが、伏兵が有るのどううかと疑つて引き返した。

〔それから五日後の〕

日付の点からいへば、七月九日になつて、男吹負が果安に敗れたとを聞き、置始連菟に千余騎を率いさせ、急に倭京に馳せさせた。

というのとは、どうも訝かしい。

急らというよりも、遅すぎる話である。

もーも、この天武紀元年七月九日、是の日の記事が誤つていないとすれば、次のような

か かん
遠く区す 260P

大野石軍安→大治人軍 4915P
4922P 20 4929P

紀下402 10行
下文 4926 8行上

4924P

紀下402

4943P

二と

情況が想像される。

●七月四日に、古京の近くまで行つた大野

君果安は、大海人皇子方につくこととなつた。

●七月九日、東道將軍紀臣阿閉麻呂等は、大

野君果安を近江(大宰府)へ追いつ返す風をよ

そおい、一軍を分り、置始連菟に千余騎を

率いさせ、急に、熊本平野南端部から、北方

の古京(合志原の都)の方へ向かつて追撃させた。

いゝまでもなく詳細は分からないが、とり

あえず、こう解いてみたい。

●それにしても、下文の二度目の七月四日条によれば、

へ七月四日、近江に敗れて逃げた吹負は、

墨坂で、すでに「菟の軍と出会った」

といひ、千グハグな感がある。

●恐らく、二度目の七月四日条は、倭国(大

和国)における出来事を記載してゐるのであろう。

予め述べる、このところは、

一日を経て(中一日おいての意で、七月

四日のこと)、近江(天智上皇)の軍、諸の

道に當りて、北から西から、多く至る。

即ち並に相戦ふこと能はずして、解き退く。

② 4938° 北 F396' 119T
① OK 49723 ③ 4898

是の日に、將軍吹負（三日前の七月一日に、乃
樂に向かた高市の御行）、近江の爲に敗られ
て、特一二の騎を率て走ぐ。墨坂（三輪山あ
たり）に逮りて、たまたま菟が軍の至るに逢
ひぬ。更に還りて金網井（今の奈良県橿原市
今井町付近かという）に屯みて、散ゆる卒を
招き聚むし
と、倭国（大和国）での戦いとを別々に書き
分けているのである。
とはいえ、日本書紀の執筆者達は、あ
えて紛らわしくし、後代の読者を惑わす爲
・二人の吹負（男吹負と高市大卿）
・二人の佐味君宿那麻呂（佐味君少麻呂父と子か）
・二人の置始連菟（父と子か）
の名をちりばめたのであらう、と推察される。
しかし今日、そのようなカラクリがあるな
どとは、知るよしもなく、

大倭国（肥後国）での戦いと、倭国（大

杜撰 1190

4922-1/219 4926
4,926
敗れぬにこそ...
下文 4924 10.5 斤

和国)での戦いさ、一連のものと考え、
無理やり結びつけて解説しよう
とするものだから、うまく噛み合わないの
で、
「ろう、と思われ。」
例えは、次のように言われている。
「大伴吹負が乃樂山で大野果安の近江軍に
破られたのは癸巳(七月四日)の二とであり、
下文(二度目の七月四日条)によると吹負は
敗走の途中墨坂(奈良県宇陀郡)で置始菟の
救援軍に出会ったという。従って、東道将
軍紀臣阿閑麻呂らが置始菟を派遣したのは
より以前(の七月四日)のことであり、
七月九日条に置始菟を派遣したというのは誤
りであろう。」
という。(「日本書紀」(F) 日本古典文学大系
岩波書店、三九九頁注三〇参照)
なるほど、杜撰に見える。
しかし、ただたんに、杜撰に見えるだけの
ことであらう、と思われ。
ともあれ、この物語では、吹負・佐味君宿

天つき
改行

続紀(白)11-133
記下589P注

続紀録(2)9P
427P(08)

17X2
賜目 996P

4927P

那麻呂 だけでなく、

〆置始連菟もまた、二人いたのであらう

と解いて話を追めて、

な お、続紀、元正天皇の霊龜二年(七一六)

四月条に、

「壬申の年の功臣、
贈小錦上置始連

宇佐伎が息(息子)正八位下虫麻呂ら十人に

田を賜ふこと各々差あり

とある。

祖父置始連菟の名を、
壬申乱後父が受

け継いだめたらう。

●そして、霊龜二年(七一六)、宇佐伎の子

息の虫麻呂ら十人に、賜田の詔があつたの

であらう、

と考えてみた。

*

だろ 前19P

H9.5.4(回)
H5.11.13(土)

下400P 18

4,928P

4921P 18

4919P 18

32下399P 18

潰滅 363P 18

近江軍(大友天皇軍)、潰滅

七月十三日

大誼人皇子軍本隊の村国車男依らは、先述のとおり

七月七日に、近江の軍と、息長の横河に戦

破つて、将境部連葉を斬り、

七月九日に、近江の将秦友定を鳥籠山に討

ち、こ小を斬った。

しかし、その後の三日間ほどは、容易に

進撃できなかつたようである。

大誼人皇子軍の本隊が、近江京(大宰府)

へ近づいてきたので、大友天皇軍の反撃

の激しさが増していったのであろう。

それでも、大誼人皇子軍は、近江軍の力を

少しづつ突き崩していった。

七月十三日条に、

男依等、安河の濱に戦ひて大に破りつ。

則ち社戸臣大日・土師連千嶋を獲たり

とある。(紀)

男依らは、安河(野洲川)に相当する川(博

米

と思われ

408622^P 4915^P 4924^P 64^P
1582^P 4928^P

4,929^P

1994^P 408622^P
別動隊 紀下396^P 紀下

紀下400^P 2行 4277^P
紀下 左端 18行 とダブ

七月十七日

栗太の軍を討ちて追ふ

とある。(紀)

あるいは、近江国栗太郡に相当する所、
筑前国鞆手郡(和名抄)の軍を追ひ松ったの

であうか。

米

なお、丁度そのころ、大倭国(肥後国)

から北上してきた大海人皇子軍の別働隊が、
大いに活躍したのも知られる。

七月十三日に、男依が博多湾方面で戦つ

ている時、定かでないが千余騎を率いる置

始連菟らが、福岡県朝倉郡(旧夜須郡)の

夜須川のほとりで戦ったとであらうか。

そして、四日後の七月十七日に、夜須郡内

の栗田(和名抄)で近江軍を討ち、追ひ

松ったのであうか。

平城 1902 天拝山 1034 緯度 1469

瀬戸 1252 4,930

165 4623 杉本 門 紀 400 29

なと 想像される 詳細は分らない

七月二十二日

七月二十二日条に、
男依等瀬田に到る

とある。(紀)

(1) 男依らは、近江国栗太郡勢多郷に相当す

る所 筑前国糟屋郡の勢門に到った、

という環境であらうか。(「和名抄」へ糟屋

郡、勢門)。帝国地名辞典に太田爲三郎、

名著出版へ勢門参照

(2) 男依らは、瀬戸(狭門)の

意)ともいえる。水城のあたりの狭隘な地を

通って、本陣に迫ったのだらうか。

この時、大友天皇と群臣とは、橋(宇治橋)

か)の西に大きく陣をかまえ、その後方がど

こまで続いているのか見えないほどであつた。

平城(平地に築いた城)である都府

楼は、宇治に逼った牙城でない。

また、大宰府の南には、天拝山や、

池 丈=約3m

井上下301^P

改訂 4.931^P

前頁15行
紀下400^P49 (宇治橋が)

平城云1902^P

③ 紀下4919^P11行

口 椽城^キ口 (基^キ肆^シ城^シ) がある。
口 恐^{おそ}ろく、
口 へもはや、口 大野^{おほの}城^シ口 や口 水^{みづ}城^シ口 も打^うち破^{やぶ}
口 られた爲^{ため}、口 大友^{おほとも}天^{てん}皇^{はう}と群^{ぐん}臣^{しん}とは、御^み笠^{かさ}
口 の橋^{はし}の西^{にし}、つまり口 天^{てん}拝^{はい}山^{さん}口 や口 椽^き城^シ口 寄^よ
口 の民^{たみ}家^けの無^ない所^{ところ}に陣^{じん}を敷^しいて、戦^{たたか}いに臨^{のぞ}も
口 うとさ小^これたのであ^あうう^う ✓
口 と推^{おし}察^さされる。
口 軍^{ぐん}勢^{せい}の獲^は藏^{ざう}は野^のを^をお^おい、そのかき立^たて
口 埃^{ちり}塵^{じん}は天^{てん}にとどくほど^{ほど}打^うちならす^す鉦^{かね}鼓^{つづみ}の響^{ひび}き
口 きは数十^{しうじ}里^りにとどろきわたり、矢^やは続^{つづ}けざま
口 に放^{はな}たれて雨^{あめ}のよう^{よう}に降^ふりそ^そいだ。
口 近^{あふ}江^み (大^{だい}宰^{さい}府^ふ) 一^{いっ}軍^{ぐん}の将^{しやう}智^ち尊^{そん}は、精^{せい}兵^{へい}を率^{ひき}い
口 ま、さきに立^たって防^{ぼう}戦^{せん}した。近^{あふ}江^み方^{かた}は、橋^{はし}の
口 中^なほとを三^{さん}丈^{じやう}ばかり断^たち切^きり、そこ^{そこ}に一枚^{まい}の
口 長^{なが}い板^{いた}を置^おき、板^{いた}をふんで渡^{わた}ろうとする者^{もの}が
口 あれば、すば^{すば}さま板^{いた}を引^ひいて落^おとそう^{そう}といた
口 大^{おほ}分^{ぶん}君^{きみ}稚^わ臣^{しん}と^とい^い者^{もの}が^が長^{なが}い矛^こを捨^すて、甲^{こう}を
口 重^{かさ}ねてつ^つけ、刀^{かたな}を抜^ぬき^き長^{なが}い矛^こを捨^すて、甲^{こう}を
口 重^{かさ}ねてつ^つけ、刀^{かたな}を抜^ぬき^き長^{なが}い矛^こを捨^すて、甲^{こう}を

平成元 2/26(日) 命が3か3 紀下 井上(中) 301P
→ 4906 紀下400 145 400 宇信谷下240
4.932P

に まどい へ 380
逃が惑う 1690 揺ぎ分く
逃走した15か

改行
いっきに

渡った。稚臣は、板に結ばれて、綱をたち
切り、矢をこうありつつも敵陣に突入した。
つ、鏡け、橋を渡って敵に襲いかかれ
ここに近江(大宰府)の軍兵達は、たちまち
乱れて逃げ散り、
近江の將軍智尊は、刀を抜いて逃げざる者
を斬ったか、もはや浮足だった兵達を押しと
どめることなど出来なかった。
橋のたもとで斬られた。
大海人皇子軍の兵達は、逃げ惑う近江の軍
兵らを掻き分けながら駆けまわり、大友天皇
の姿を探した。
かし、大友天皇・左右大臣らは、命から
から、その身だけは辛うじて免れ、逃走した
逃げられてしまったか
しかたなく、男依らは、栗津岡(不明)のふ
もとに軍隊を集結させた。
なお、七月二十二日の是の日条に、
是の日に、羽田公矢国・出雲臣伯、合ひ
共に三尾城を攻めて降しつ

4,932^P - 2/2

・カラー

・頁の上半分にはみ出して大きく掲載下さい。

空のヨングレイン

赤色部分もカットしないで下さい。

黄緑部分のヨングレイン



13QG

14QG

写真版 764 復元された壬申の乱

『日本の歴史』飛鳥の朝廷から平城京へ 学研教育出版 2012年11月27日発行 末尾からの9頁参照
 12QG あが はた も ぐんたん おほしあの みこぐん おほしあのみこぐん
 ・左の赤い旗を持つ軍団が大海人皇子軍 右は大友皇子軍である。 187^P

4,933^P

④4906^P 車場²³⁴⁸

とある。(紀)
 羽田公矢国と出雲臣^{いづものおみ}伯^{はく}とは連携^{れんけい}
 筑前^{ちくぜん}国の志賀島^{しかのしま}あたりにあつた^ミ三尾城^{みおのき}を
 攻^せめ落^{おと}したのであろう。(既述)

*